

不如省一事

東 泰孝

薬学部出身者として獣医学教育にあたる。縁の奇妙さを感じつつ、間もなく三年がすぎようとしています。前職、薬学部出身者として歯学教育に携わった経験が活かしていることは感じつつも、歯学と獣医学の違いもまた懸絶の感があります。しかしながら、このような三者三様の経験値が渾然一体となり、新しい何かを得つつあると感じています。例えば、醤油の味付けしか知らなかった者が、酒に加えて、酢の味付けを覚え、よりよい創作料理を作り出せる可能性（作り出せるとは限らない）を手に入れたような感じでしょうか。

「経験」というものは減ることはなく、一生をかけて増え続けていくものです。しかしながら、何かを得る代わりに何かを失ってはいないでしょうか。恐れるのは「感覚」が失われていくことです。知識・経験が増えることで未来に繰り出す次の一手の選択肢は増えることでしょう。ただ、「選択肢が増える」ことは、「どの一手を指すか」という迷いが生じてしまいます。そのため、迷わないためにこそ「感覚」が切要だと思っています。

手元に学部3年生の時に書いたレポートがあります。特別活動論という教職課程の講義の中で、私は大学教員を目指し、その根本に「道標」という言葉を置きました。弱冠20歳の時のレポートですが、今、読み直してみると、教員を目指した初心が鮮やかに蘇ります。今、多くの学生達を目の前にして、彼・彼女達に選択肢の多さを示す一方で、返って迷いの多さを現出させてはいないだろうかと感じています。同じ迷うにしても、その「迷い方」も大切ですので、今思う「道標」について自問する毎日です。

僭越がすぎるのは承知の上で、年五十而知四十九年非 行年六十而六十化を目指し、新しい「道標」となるべく研鑽を積んで参ります。